



ウガンダ

プロジェクトストーリー「漫画版」

# 人道と開発 をつなぐ

アフリカにおける新しい難民支援のかたち



紛争や政情不安の影響で人生を奪われ、故郷から移動しなければならなくなった「難民」や「避難民」と呼ばれる人々がいる



彼らの多くは、一時的な退避ではなく、その後も長い間避難先で暮らし続けなければならないのが実情だ

アフリカに南スーダンという国がある



2011年  
独立

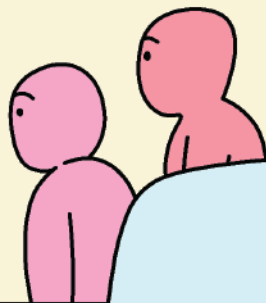
2013年  
2016年  
国内で  
紛争発生

多くの人  
国内・外へ  
逃れた



現在、南スーダン人の3人に1人以上が  
自分の家を失い国内外に避難しているという

そして彼らの多くはすでに5年以上も  
避難生活を続けている



その存在は遠く、どんな問題が起きているのか、  
日本にいる私たちがその様子を知ることはなかなかできない

「難民支援」に対してJICAができることは、組織や制度の特性上限られていた



難民支援と言えば、国連や民間NGO団体など人道支援機関による緊急支援が中心だ

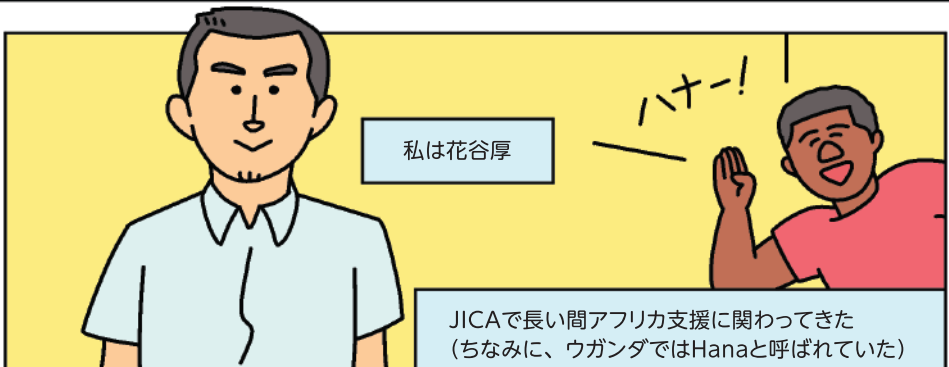
難民支援＝難民発生の緊急事態対応、国際機関やNGOなどの緊急人道支援機関が実施

しかし…難民の人たちが国外で暮らす期間の長期化によって、  
これまでの緊急対応だけでは間に合わないことがたくさん起きつつあり、  
(国際的には、同一国籍の2万5千人以上の人が、受け入れ先で5年以上難民として暮らしていると、長期化しているとみなされます)

難民や難民を受け入れる人たちの  
「人間の安全保障」が脅かされる状況が生まれているのだ  
(人間一人ひとりの安全の確保と尊厳ある生の実現に着目する考え方であり、国家の安全保障と相互に補完し合うもの)

隣国の南スーダンから多くの難民を受け入れている、ウガンダという国がある

このストーリーは、日本政府、JICAによる長期化した難民状態にある人々に向けた協力の歩みを、  
この活動にJICA職員の立場で直接関わった私、花谷厚の視点から描いたものである

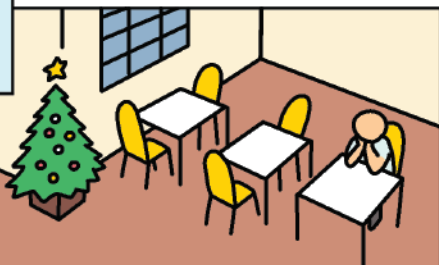


独立行政法人国際協力機構(JICA)=協力対象国の社会経済の長期的発展への貢献が使命

2013年12月25日

私は1人ケニア・ナイロビのホテルの食堂にいた  
クリスマスでだけでもいい

混乱の南スーダンから無事退避できたことに  
ホッとする一方で、自分のこと、  
南スーダンの行く末について不安を感じていた



この10日前、12月15日深夜

南スーダンの首都ジュバで、大統領派と元副大統領派の武力衝突が発生

全国に混乱が広がる中、食べ物や燃料がどんどんなくなり、  
「反政府勢力がジュバに迫っている」と情報が入る

※反政府勢力：元副大統領派勢力

このままだと日本人も  
紛争に巻き込まれかねない

2005年の南北スーダン和平合意以来、  
プレハブ造りや改造コンテナの小さな部屋に暮らしながら、

新しい国づくりに一生懸命協力してきた私たちが、  
JICA関係者44名は全員国外退避することとなった

JICA事務所長だった私は全員の退避を見届けた後、最後の1人としてこの日ナイロビに退避  
緊張の10日間をくぐりぬけ、何とか私も無事日本に帰ることができた



帰国後も現地の様子を伺っていたが、混乱は一向に収まりそうもない

そのため、進行中のプロジェクトの多くを一旦中断し  
契約を解除する手続きに追われた

その一方で、

日本においても紛争下の現地の人たちには何もできない  
今私たちにできることって何でしょうか？

日本で契約手続きばかりしているだけでなく、  
南スーダンに少しでも近いところへ移動して、  
協力を継続することはできないでしょうか？

そうだな 日本にずっといても  
何も始まらないよな  
南スーダンの隣国、ウガンダの  
事務所に連絡を取ってみるよ

みんな!ウガンダの事務所長が私達を受入れることを了承してくれた!

3月末から順次、私達はウガンダへ行って協力を再開するぞ!

混乱の中、この4カ月で3度目の引っ越しになりますね(笑)

私達は多くの混乱を潜り抜け、ウガンダから南スーダンへの協力を一部再開することになった

2011年に独立した新しい国、南スーダン

日本の1.7倍の国土全域は (☹)

ユーラシア大陸

独立前の長年の内戦の影響 → 低開発!!



保健 教育 水供給 電力 道路

基本的なインフラ = 決定的に不足 (☹)

世界最貧困国

アフリカ大陸

2013年から 続く混乱

国民の 1/3以上



難民・国内避難民として故郷を追われる

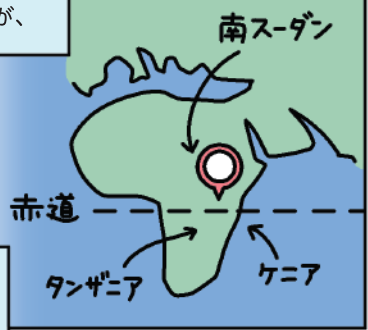


国内避難民=紛争や暴力などにより住んでいるところから移動を余儀なくされたが、自国に留まっている人たち

そんな南スーダンからの難民を最も多く受け入れているのが、お隣のウガンダ共和国

- ・国土 = 日本の本州くらい =
- ・人口 = 約4700万人
- ・首都 = カンパラ

2022年現在、ウガンダは南スーダンを始めとする周辺国から約150万人の難民を受け入れ、アフリカで最大の難民受け入れ国となっている



私が思うにウガンダの国の人々は (アフリカ全体でそういった傾向がある気もするが) とにかく心が大きくフレンドリーだ

アフリカではその歴史上、国境は民族的なまとまりに関係なく設定されてきた

だから国境を挟んで同じ民族が暮らし、お互いに頻繁に行き来してきたのだ

さらにウガンダでは、自分たち自身が難民となって周辺国で受け入れられてきたという過去もある

そういうこともあってウガンダでは、難民受け入れに対して寛容な取り扱いをしてきた

ウガンダでは、4月から仕事を再開した

しかし、カンパラは、南スーダンのすぐ隣とは思えない発展ぶりだな



買い物や食事にも困らない



何より、ホテルのシャワーがちゃんと温かい!

中断していたプロジェクトの南スーダン政府関係者をこっちに招いて、協力を再開することにしたよ



こちら関係者の無事が確認できました  
また一緒に仕事できるなんてうれしいですね  
でも、テレビみましたか?



ウガンダに逃れて来る数十万人の南スーダン難民のこと、だよな



我々の協力相手も家族や親族をウガンダに退避させていますし

今の南スーダンでは、政府が国民を保護し、暮らしに必要な最低限のサービスを提供する…そんな、平和な国では当たり前のことが難しい状況なんです



南スーダンの難民支援か  
でも難民支援は「人道支援」の役割…

JICAの行う「開発援助」の出る幕はないか…



それにしても、ウガンダに避難してきた南スーダンの難民に、JICAとして何か協力できないだろうか?

漠然とこのような思いを抱いていた時…

ハナ、ウガンダの援助関係者の間で、北部の南スーダン難民受け入れ地域を視察する企画があるらしいですよ

本当？  
それは是非参加したいな  
南スーダンの人達が今  
どんな環境にいるのか、  
知りたいですね

ついこの前まで同じ環境に  
いたんですよ ハナなら  
そう思うと思います

ここは？

国境の町だよ  
あれは南スーダンから  
トラックに乗って逃げてきた  
難民母子の一団だね

あの人は、UNHCRが設けた  
一次登録所で順番を待ってるんですね

女性と子供たちばかりだ

ほら、  
あの人たちの顔を見て

これからここで暮らしていかなきゃ  
ならないんですからね

ここまで逃げてくるのも大変だったろうけれど、  
これから先ちゃんと暮らしていけるだろうか

南スーダンから緊急避難  
してきたばかりの頃の  
自分たちを思い出すな

ウガンダスタッフにも私にも、  
人々の不安げな表情が  
目に焼き付いた

カンパラに帰るとすぐにJICAのスタッフに北部で見た状況を話した

ちょうどその頃、UNHCRとJICAの間で、  
JICAの稲作プロジェクトに難民を含めて支援できないか話し合いが行われていた…

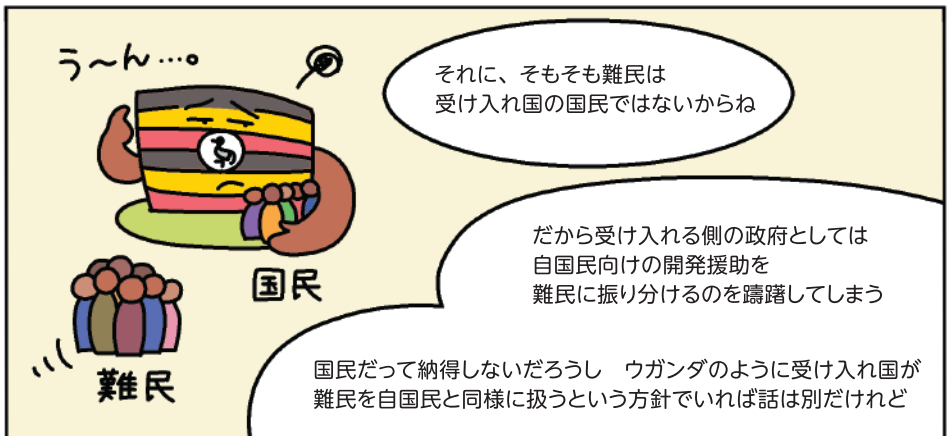
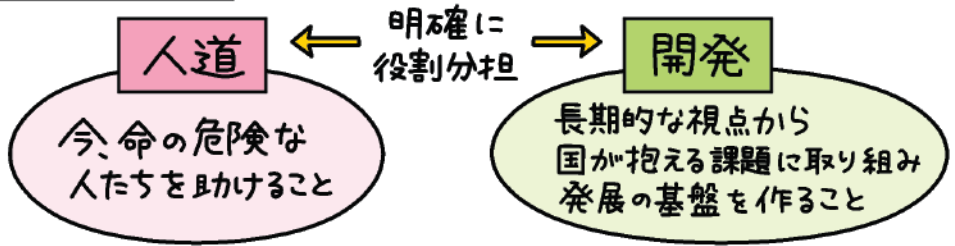
しかし、その対象地域はこれまでJICAで協力してきた  
ウガンダの南西部が中心で、北部は含まれていなかった



この稲作プロジェクトによる難民支援の活動は、今日まで継続して実施されている  
こうして始まったのがJICAの「開発援助」による難民支援だ



改めて説明すると…



2006年

ウガンダで難民法が改正

ウガンダにいる難民

土地を耕すこと OK、自分で仕事を探して収入を得ること OK

30m×30m  
くらいの土地を  
与える



家を作る資材  
種などを  
与える



食物を  
作って販売



移動の自由  
※条件つき



就業の  
自由



難民を国境近くの辺境地に強制隔離する国がほとんどな中  
この配慮ができる国はウガンダ以外になかなかない

さらに2015/16年から開始された国家開発計画では、

難民と共に生きることを前提に、難民受け入れから生まれる様々な課題を  
国家開発計画の一部、自国の開発問題として位置付けていた

受け入れ社会として互いに打ち解けて  
仲のよい状態で暮らせるよう、

ウガンダ国政府自体が  
取り組むことを  
宣言しているのだ

なかよくしよう!!



このような条件が整っていれば、開発援助機関でも難民支援ができるのだが...



私や当時の南スーダン事務所関係者が、  
ウガンダに逃れていた時代に始められた難民支援プロジェクトは2つある



1つは、ウガンダでの稲作振興プロジェクト、「PRiDe プロジェクト」  
もう1つは、南スーダンでの職業訓練プロジェクト、「SAVOT プロジェクト」

## PRiDe プロジェクト

ウガンダにおけるコメ増産が目的  
農業研究機関との協力による栽培技術開発、  
農業普及関係者・農民に対する技術普及等を支援している



2011年、ウガンダの農民に対して稲作栽培指導を開始  
2014年、難民も含めて研修を実施  
2021年までの8年間に研修を受けた難民は約2,000人にも上る

## SAVOT プロジェクト

南スーダンの首都ジュバにある職業訓練センターの  
機能強化が目的

私たちがウガンダにいた2014年、  
このセンターの指導員をウガンダで  
再トレーニングする機会を作り、

指導員の「実地研修」として、  
自国民である南スーダン難民に対しても  
訓練を行ってもらった

2014年～翌年  
訓練を受けたのは  
約160人の難民  
約70人のウガンダ人

ウガンダのNGOと協力

難民居住区に住む  
難民に職業訓練を実施



理髪・美容



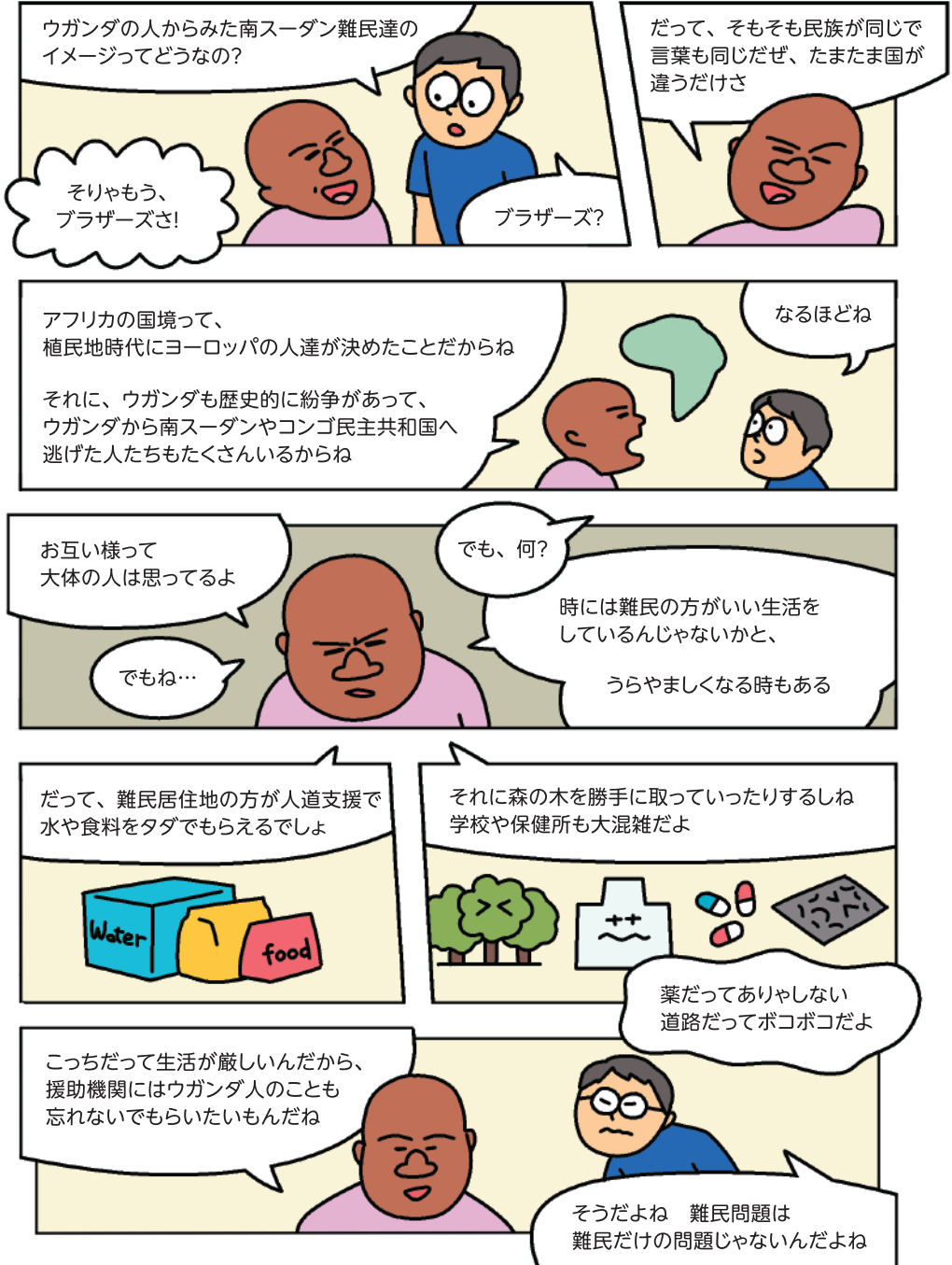
建築・木工

これらは難民の自立化を目指した支援 つまり「人道支援に頼らない生活」を目指している

JICAが難民を支援するのは画期的だったが、もちろん良い事ばかりではない…



そもそもウガンダ地元住民は南スーダンの難民のことをどう思っているのか





時は流れ、私が帰国してから約1年経った2015年

私は、JICAの中で平和構築支援を担当する社会基盤・平和構築部の平和構築・復興支援室に配属されることになった

帯刀豊さん

ここでは平和構築分野のアドバイザーを務めていた帯刀豊さん達により、長期化する難民に対する主要援助国・機関の対応を整理し「JICAとしてどんなことが出来るのか」についての検討が始まっていた

結論はこうだった

「長期化状況にある難民に対する開発援助は人道支援が終了してからではなく、並行して行われるべきだ」

平和構築室内の工藤美佳子さんと小向絵里専門員と話し合い、どういう形でJICAが難民支援を行えるかについて議論を深めた



JICAは開発援助機関だから、基本的に人道支援を行うことは想定されていませんが、開発援助ならではの視点で、広い意味での難民支援を行うことができますと思います

特に、大きな影響を受けている受け入れ社会や地方自治体への支援が重要ではないでしょうか

JICAは途上国の自治体に対して支援を行ってきたから、その経験も生かすべきだと思います

難民との共生社会を作るには受け入れ社会の人々の生活も改善する必要があると思います



ウガンダについては大量の難民を受け入れていて、受け入れ社会が大きな負担を強いられている



だけど人道支援は受け入れ社会や地方自治体の支援は対象としていない…

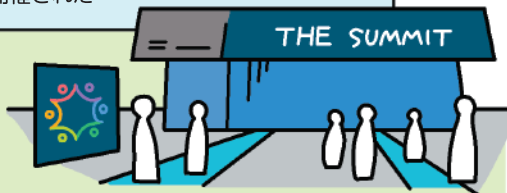
つまり、人道支援による難民支援と並行して、受け入れ社会や地方自治体を支援する必要がありますよね

JICAの行う開発援助が強みを発揮できる分野でもありますね!



2010年以降、中東地域における民主化を求める反政府運動や、シリア紛争の影響で発生した大量の難民・移民など、国際情勢が混んとしていたこの頃、難民や人道問題に関する大きな国際会議がいくつも開催された

## 最も大きなものは2016年 トルコ・イスタンブールで開催された 「国連世界人道サミット」



「人道危機への効果的で効率的な協力のあり方」について話し合ったこの会議には、173カ国、国際機関、市民社会等から9,000名以上の人道関係者が参加した

参加国、参加者が人道支援への公約を新たにすると共に、



人道支援だけでは人々のニーズに応えることができないため、新たなやり方が必要であり、人々が自分の手で自分の国の未来を切り開くための「力」を手に入れる大切さが強調された

## 国際的に移民・難民問題に大きな 注目が集まった2016年

## 「難民と移民の大規模な移動に 関する国連サミット」という、 もう一つ大きな国際会議が開催された

国連総会議場@ニューヨーク



そこで出されたのが、2018年までに難民と移民の支援について国際合意文書をつくることを目指す、「ニューヨーク宣言」である

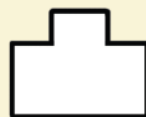
移動を強いられた難民等の人々に対する人道的な対応や人権の尊重と共に、人道と開発の連携を進める事、教育・雇用機会の創出、人道支援にとどまらない支援を行うこと等の重要性が強調された



人道



難民



開発

日本政府もこれらの国際会議に参加し、国際社会による取り組みを積極的に支援する用意があることを表明した



2016年9月国連サミット終了後 今度はニューヨーク宣言を踏まえ、JICAにおいて難民支援を具体化する作業が始まった

花谷さん、平和構築室の責任者ですか  
なかなか大変ですね

政府公約の「2016年から3年間で総額28億ドル規模の支援」  
をJICAとしてどうやって具体化するか…

アフリカ担当部署などとの  
協議・調整を踏まえて、  
平和構築室で支援方針を作成しましょう

難民というと、テントが並び  
難民居住区に住んでいるイメージが  
強いけど、現実の難民は  
人道支援物資だけに依存して  
暮らしているんじゃない

難民受け入れ国負担  
を軽減する支援を  
行うこと

難民の自立化を  
促進する支援を  
行うこと

この2つが  
柱となる方針！



限られた収入だけど、みな自活してるし、  
受け入れ社会の人々と互いに必要な存在と  
なって暮らしています

彼らの生計向上を考え、受け入れ社会との平和的共存に  
導くことが大事ですね  
それが受け入れ社会の安定化にもつながる

難民の自立能力が上がると  
将来、自分の国に帰った時、  
国づくりにも貢献できる



人材育成は、キャパシティ・ビルディングという  
JICAが長い間取り組んできた活動を生かすことに繋がる  
キャパシティ・ビルディング： 開発途上国自身の能力の構築・向上を目的とした支援

難民と受け入れ社会を一体的  
に支援をすることが重要だね

JICAでもこの機会に、中長期的観点から難民問題を考えるようにして、  
人道支援だけではカバーできない、開発機関の経験を活かした取り組みをしないといけないですね

その頃南スーダンでは、2013年12月の武力衝突の後、2016年7月に再び武力衝突が発生  
前回は上回る大量の難民がウガンダに

難民受け入れによる地元社会へ負担が大きくなる中、  
ウガンダ政府と国連は2017年6月に  
「ウガンダ難民連帯サミット」を開くことにした



国際会議  
関係各国



難民受け入れ国 ウガンダの  
負担軽減について議論  
支援を募ろう!!

この機会にJICAでは、  
難民受け入れに最も大きな負担を払っている受け入れ社会とその地方自治体に  
焦点を当てたシンポジウムを開くことを考えた



しかし、ウガンダ政府にそのアイデアを話してみると…

JICAは長い間、南スーダン難民を受け入れている  
ウガンダ北部の地方自治体で活動してきました

ウガンダ政府首相府

北部の自治体では、難民受け入れにより  
今大きな影響を被っているが、  
十分な支援を受けられていないと聞きました

そこで今度の連帯サミットで、JICAは地方自治体にも  
国際社会の支援が向けられるよう訴えるシンポジウムを  
開催しようと思うのですが

UNDP

国連としてもその取り組み、  
支持したいと思います

UNDP=貧困や格差、気候変動といった世界の開発問題に取り組む国連機関

そんなことを言って予算も何もくれないじゃないか  
それに我々の地域は元から開発が遅れている  
それでどうやって難民を学校や保健所で  
受け入れろというのか!

難民問題は中央政府、  
なかでも首相府の所管なんですよ

首相府は難民受け入れについて地方自治体には  
必要な時には相談しているし、何の問題もないんですよ!

ウガンダ政府地方自治体・地方議員



この問題はウガンダ政府内で権限争いを含む大きな問題となった

しかし、地方自治体の受けている影響はウガンダ政府でも無視できないものであったため、  
ついに「難民受け入れに関する、地方自治体の役割に関するシンポジウム開催」が承認された

2017年6月 ついに「ウガンダ連帯サミット」が2日間に渡って開催された

出席者は約500名



ホスト：  
ムセベニウガンダ大統領

グテーレス国連事務総長



グランディ国連難民  
高等弁務官



コンデAU議長



その他アフリカ各国の国家元首や  
日本の岸信夫外務副大臣が出席

サミットでは、「ウガンダ政府の難民受け入れを国際社会で支援すべく、20億USドルの支援」  
を目標にした結果、合計3.5億ドルの支援表明があり、日本政府も1000万ドルの支援を約束した

JICAとUNDPによるシンポジウムでは、  
国務大臣、  
地方自治省や  
地方自治体の高官、  
UNDPウガンダ事務所代表  
などが登壇





シンポジウムでは…

ウガンダが難民に  
・移動の自由  
・土地提供



基本サービスの提供



寛容な政策を評価!!!



その一方で、大規模・長期化した難民の存在が  
ホストコミュニティと地方自治体に  
大きな負担を強いているという問題を指摘



しかし地方自治体には追加予算が割り当てられておらず、今ある予算・人員での対応を  
余儀なくされているということを自治体自らの声で明らかにした

この問題に対しJICAはウガンダ北部の地方自治体に対する支援を強化することを発表



結果、このイベントは参加者を多く集め、翌日ウガンダ大手新聞も大きく取り上げた

このサイドイベント開催を成功させ、私の平和構築室での任務はとりあえず終わった  
でも、成功と共に強い思いが芽生えた

この取り組みを会議の場ではなく、  
現場で発展させたいと…



平和構築室での職務を離れた私だが、やはりウガンダの現場での取り組みを続けたいと考えていた

同じ頃、平和構築室では、ウガンダ北部におけるプロジェクトであるWACAPのプロジェクトリーダー後任者を探していた

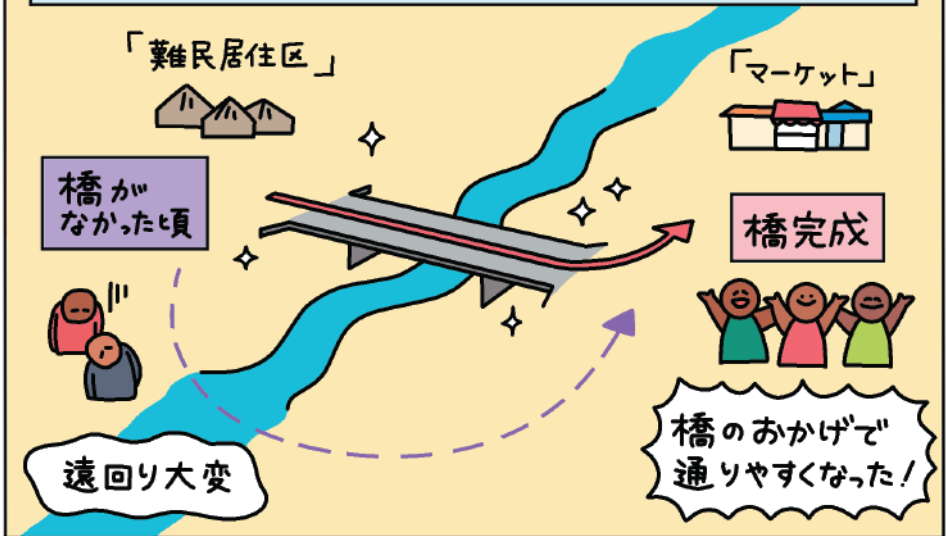
WACAP=  
北部ウガンダの地方自治体の  
行政能力強化を目的とした  
JICAのプロジェクト

長期化難民危機に対する支援方針を現場で実践に移す  
良いチャンスになると思い、そのポストに応募

再びウガンダに赴任し、同じ志を持つ仲間たちと共に、  
難民受け入れ社会支援に、現場で従事することに



その後の約2年間で、  
日本政府の支援により難民受け入れ地域の道路、橋、学校などが整備されていった



国全体の取り組みにおいても、  
難民支援を話し合う組織に地方自治省が共同議長として加わり、地方自治体の声が反映されるようになったり、地方自治体の開発計画に難民の影響を盛り込むことが正式に認められるようになった

こういった地方政府に対する支援は、  
ウガンダの難民問題対応の制度や枠組みに大きな変化を与えたのだった

JICAスタッフが、難民の1人にこんな質問をした

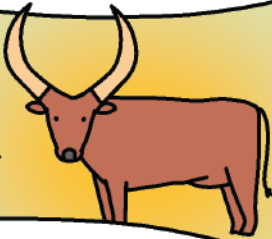
この先、どうしたいと思っていますか？



だから、自分の国に土地を持っている人は、  
難民居住地で比較的平和に暮らせていても、  
その土地に帰りたい…と思う人が多いです



はい それに僕たち牧畜民にとって、  
牛は命よりも大事と言っても  
いい存在なんです



う、牛??

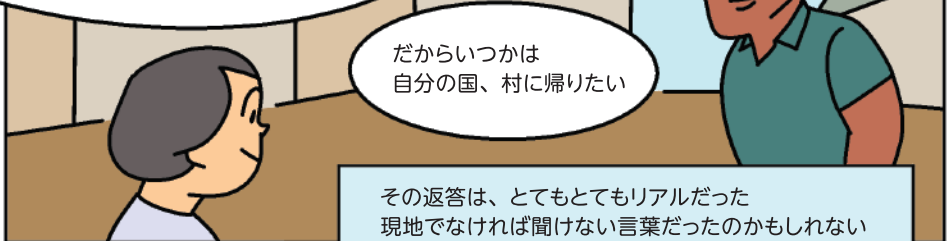
僕たちは牛とは兄弟のように育てられ、  
共に育て生きてきました

だから、ずっと先になっても  
牛を飼って一緒に生きていきたいと  
考えています



この難民居住地では本当に良くしてもらっています  
家を建ててよかったり、畑を耕せたり、  
とても感謝してるけど、  
牛を飼うことはできないんです

だからいつかは  
自分の国、村に帰りたい



その返答は、とてもとてもリアルだった  
現地でなければ聞けない言葉だったのかもしれない

プロジェクトを共に進めたウガンダ人の仲間と話し合った日があった

「人道と開発をつなぐ」という言葉、昔から言われているけどやはり大変ですね



人道



開発

「人道」と「開発」は、そもそも仕事のやり方が違うので、乗り越えられないギャップがありますよね



現地が一番強く感じるんです

ウガンダ政府の中でもギャップがあると聞きます



難民支援を管轄しているのは中央の政府だけど、実際に難民を受け入れて教育や保健サービスを提供しているのは、地方の県や市町村の人々だったり



中央と地方のバトルのような構図がありますよね

人道と開発、中央と地方のバトルかこれらを乗り越えるにはどうしたら良いだろうか



それには難民のニーズを中心に考えることが大事なんじゃないでしょうか

政府機関や援助機関の決まりごとを中心に考えるんじゃないかと



ポン!!



それは大事な視点だね  
支援の対象となっている人たちのニーズを中心に  
考えることは私たちの活動の基本でもあるわけだし

ウガンダの経験から  
私たち日本人が学べることって  
何なのだろうか



まずは私達の国、  
ウガンダのような国の存在を  
知ってもらうことでしょうか

日本のように難民が簡単にはたどり着けない国も  
ある一方で、地理的な理由で受け入れざるを  
得ない国もあります



遠すぎて  
ムリ...



そして我々、難民を受け入れている国が、大きな負担を  
払っていることも理解してもらいたい



ということは、  
難民を直接支援することだけが「難民支援」ではなく  
難民を受け入れている国を支援することも  
立派な難民支援になるということですね

はい さらに、難民は一過性のものじゃなく、  
何十年もそこにいるのが当たり前だということも、  
理解してもらいたい



そうなる難民と受け入れ社会の共生も  
重要な問題になってくるよね

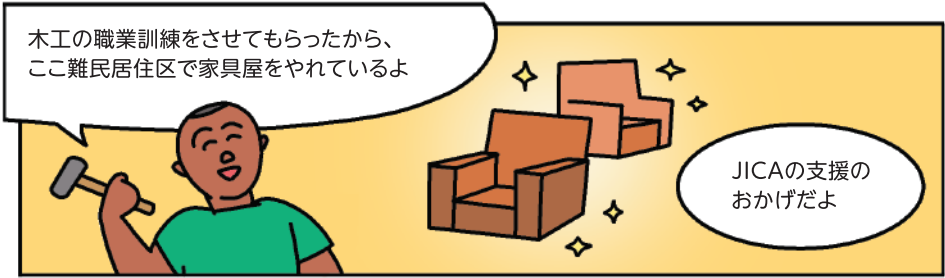
そうなんです 難民の人たちも避難先で  
長い間暮らすことを余儀なくされて大変ですが、  
受け入れる側でも難民と受け入れ社会双方に  
利益が生み出されるような形にしていかないと  
長続きしないんです




ですね

国際化しつつある今の日本の社会、  
そしてこれからを考える上で  
大事な視点だね








地元の人から土地を借り、  
トウモロコシ、ソルガム、ピーナッツなどを  
育てて生計を立てていたが、


子どものころに  
南スーダンから  
ウガンダ北部に  
逃れてきたウィーン

作物価格が下落し、  
生活が厳しくなっていた  
2014年頃




ウィーンさん、  
あなたはJICAの「コメ振興プロジェクト」の  
研修メンバーに選ばれました

ほんとう?!  
うれしい!!




コメに適した土づくりから、  
効率的な栽培方法まで、  
しっかり学べたな～

研修終了後に栽培用の  
コメの種も受け取ったし



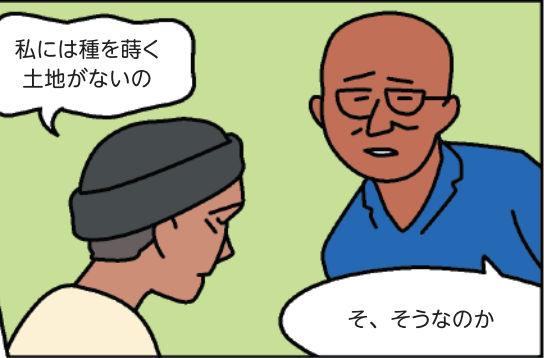
おい、ウィーン

せっかく技術を身に付けたのに、  
どうした? 浮かない顔して…



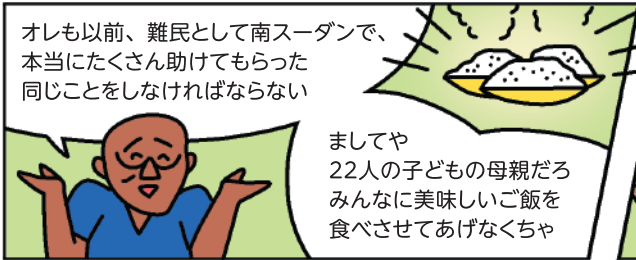
う、うん…

実は大きな問題があるの



私には種を蒔く  
土地がないの

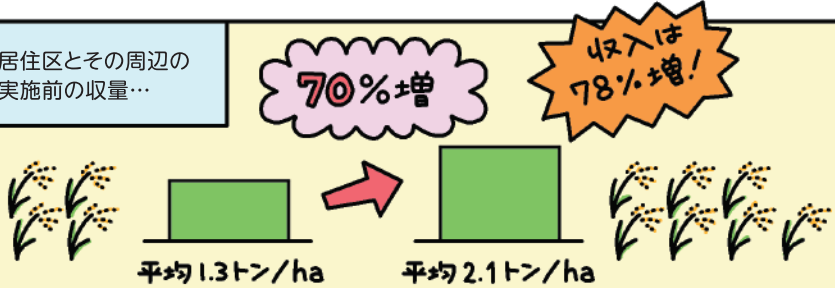
そ、そうなのか



2021年

PriDeプロジェクトは、これまでの研修受講者に対して“研修が与えた効果”を調査した

難民居住区とその周辺の  
研修実施前の収量…



稲作で得た追加収入の使い道…



生活面での変化は…



職業訓練について…

難民の修了生56%が自分の国に帰って、訓練の成果を生かした仕事をしているが、問題も判明した

スタートアップキットをもらい  
工具はあるものの

But...

作業場を借りるお金  
生産用の材料を買うお金

足りないという問題に直面



南スーダンに帰った縫製課程修了者のジュリエットに話をきいた

修了後、  
南スーダンでは  
どうですか？

顧客もできてみんなの服を修理し、  
それなりに稼いで、将来のために  
一部を貯蓄しています

材料が手に入るときは  
子供服をデザインして  
売っています

母も兄弟もみんな喜んでくれています

今後の夢は？

市場で売れる服をデザインできる、お店を持つことです  
店舗スペースを借りるための資金が必要なんですけどね

困っていることは？

雨季には私だけでなくみんなが、  
畑に働きに出なければいけないし、  
家では木の下で裁縫の仕事をしています  
雨が降るとともに働けなくなるんです

難民自立化支援は、まだまだ解決すべき問題は山積みだが、

少しずつだけど難民の暮らしにポジティブな影響を及ぼし始めているのは間違いない

私たち、日本人として  
学んだことって  
なんでしょうね？



難民支援のために日本にいる私達ができることは、  
ウガンダのような難民受け入れ国の存在を知って、

幅広い視点から難民のこと、  
支援のあり方を「考える」こと  
じゃないですかね



「困っている人を助けたい」という気持ちは  
大事だけど、ただやみくもに支援すれば  
問題が解決するわけではないからね



そうですね  
難民状態の長期化とそれに応じて求められる自立化の問題  
そして、受け入れ社会との摩擦とその克服方法など

私たちが知るべきことが  
ホントにたくさんですね

日本人は難民だけではなく、  
現実的に外国人との共生を  
きちんと受け入れなければならなく  
なっていますよね

そういう意味ではこの経験は、  
共生社会を考えるいいきっかけに  
なると思います





ハナ、このプロジェクトに関わる日本人たちは「難民の幸せ」って何だと思ってますか？

まず人として自立していること  
それは経済的にも精神的にもね

そして受け入れてくれているウガンダ人が  
幸せじゃないと難民も幸せじゃない…

うん、本当に援助されることだけが  
人の幸せなのか、ということに  
関わってきますよね

自尊心、自由  
そして自分の生きる糧は  
自分で稼ぎたい、という想い

その上で人から尊敬されるという気持ち  
そういうものがないと人間は…

何かが欠けてしまう

人間は生物的に  
ただ生きていれば  
いい動物ではない

ホント、  
そうだよ

「尊厳」

この言葉に  
凝縮されていますね  
尊厳が守られてこそ  
本当の「人間の安全保障」  
だと言えると思います

尊厳…

尊厳が守られないと、  
人は幸せでいられない  
その尊厳を支えるのに「開発援助」も  
重要な役割を果たせると思うんです

そしていつの日か平和が戻って、  
みんな自分の国で牛が飼えるように  
なればいいですね！

ですね

人道と開発をつなぐこと 新しい難民支援のかたちを作っていくこと、

それは人の「尊厳」を守ることに繋がっていくのだ



独立行政法人国際協力機構（JICA）は  
日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関として  
開発途上国への国際協力を行っています  
JICAは、「信頼で世界をつなぐ」をビジョンとして  
人々が明るい未来を信じ多様な可能性を追求できる  
自由で平和かつ豊かな世界を希求し  
パートナーと手を携えて、信頼で世界をつなぎます

## アフリカにおける新しい難民支援のかたち

紛争や政情不安などの影響により昨日までの人生を奪われ、慣れ親しんだ場所からの移動を余儀なくされる「難民」と呼ばれる人々があります。難民支援は、本来、難民発生という緊急事態への対応であるため、主に国際機関やNGOなどの緊急人道支援機関が所掌し、JICAが貢献できる範囲は限られていると考えられてきました。その一方で、紛争の長期化に伴って難民状態も長期化しており、これまでの緊急支援だけでは対処できない新たな問題が発生しています。アフリカにおける

難民は一過性のものじゃなく、  
何十年もそこにいるのが当たり前だということも、  
理解してもらいたい

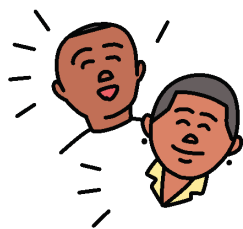


長期化難民状況にある人々の存在と、  
そこで日本が実際に行っている長期化  
難民支援活動の一端を担っているのが、  
JICAの「開発援助」の難民支援です。

## あつれき 難民と受け入れ地域住民との軋轢が発生



### JICAの受け入れ地域での包括的なアプローチ



#### ●難民への自立化促進支援

農業（稲作）栽培の指導や職業訓練を実施し、難民の自立能力向上を支援。地元経済活性化にも貢献。

#### ●地方行政能力を向上させる

難民と地域住民の関係をよい状態に保つためにも、地域の課題を統合的に評価して優先度の高い事業から取り組む。

#### ●地域を強くすることで共生関係を育む

社会サービス、インフラ整備等を通じて受入れ社会を強くすることで、地域住民と、難民の共生にもつながっていく。





企画制作・発行 : 独立行政法人 国際協力機構(JICA)

監 修 : 花谷 厚

漫 画 : uwabami

脚本・デザイン : ROOM810

発行年月日 : 2023年2月

プロジェクトヒストリー  
当冊子はこちら



この作品は事実に基づいて執筆された書籍

「人道と開発をつなぐ アフリカにおける新しい難民支援のかたち」を元に、再編集し制作された漫画です。